

## [編 集 後 記]

◇ 巻頭というものは、執筆者の永年の経験や、年来の考えにもとずいて、医学のあり方や、研究、教育ないし診療についての抱負を述べられたものであり、読む者にとって貴重な参考意見となるべきものでありましょう。

その意味から、本号の巻頭は本間先生による新しい、きわめて前向きのご提案であり、本誌の会員のみならず、できるだけ多数の方に考えていただきたい問題であると思われまふ。しかし表面的な読み方をすると、うっかり思い違いをしそうな点もあるように考えられますので、多少の私見をつけ加えさせていただきます。

◇ かつて、ゐのはな新聞にも書いたことがあるのですが、近年一部の若者たちの間にみられる近道反応とは、緒論と結論だけがあって、その間にはさまる種々の過程については、これを無視ないしはきわめて軽視する傾向を指しているものようです。すなわち風が吹いて桶屋がもうかれれば、その間に盲人が増えようが、ネコが減ろうが、“そんなこと問題じゃない”とする考え方、代数があれば、ツル・カメ算なんかいらぬとする考え方です。

◇ 一見明快にみえるこの考え方に、はたして危険性がひそんではいないでしょうか。ある年令と、それに伴う経験の程度により、ツル・カメ算で頭をきたえるべき時期、代数によって知能を訓練するべき時期といった区別が必要なのではないでしょうか。ツル・カメ算をやっていたからこそ、代数の有用性がわかるのではないのでしょうか。智識には積み立てが必要だろうと思ひます。

◇ たいへんまわりくどい言い方をしましたが、本間先生の巻頭の主旨は、誰でもが直ちにコンピューターのソフトウェアにとりかかることを強調なさっているのではなく、そこに至る段階をもう一度考えなおしてみるべきであろうと述べられているので、決して近道反応を奨励しているのではないと、わたくしは解釈したいのです。巻頭とこの後記をお読み下さって、ご意見がありましたら、是非ともお聞かせいただきたいと思ひます。

◇ 本号は脳と神経の研究特集号です。総説も講座もそれに合せてお願いしました。いたみの問題は人間にとってひとつの警告であり、同時にとり除かねばならないものです。米沢先生はこのことに関する古い知識から、新しい概念にいたるまでの詳細を review して下さいました。また神経症とはとかく軽くみられ勝ちでありなが

ら、常にわれわれにまといつこうとする“いやな奴”です。その概念や実態、診断と治療について松本先生の講座をお願いしました。お二人ともアンケートによる希望によって編集部がお願いし、ご快諾を得たものです。

◇ 脳と神経の研究特集号は本号で第7号になります。毎年1回定期的な計画として行なっておりますと、これを予定して論文をまとめて下さる方もふえ、本号では“術式”を含めて16篇にのぼる応募がありました。本誌各号をなるべく軽快なものにしようという編集方針からみると、この沢山のご応募には嬉しい悲鳴をあげざるを得ません。

これだけのものをただ並べるとは無為にすぎますので、構造学的研究、神経生理学的研究、神経薬理学的研究、中枢と末梢の循環に関する研究、神経疾患と治療に関する研究の5分野にわけてみました。それぞれに数篇づつの論文があり、本学における脳と神経の研究の拡がりや深さが一覽できたように思ひます。

◇ 個々の研究については紙数の関係でふれませんが、これらの論文の多くが、すでに出来上った研究者達の手になされた研究の報告ですので、同学者には読みごたえのあるものと思ひます。

◇ 久しぶりに木村先生の鑑定余話が登場しました。変死(1)のということで、このあとも続けて下さる予定です。降矢先生の診療のための検査は(3)となりましたが、はたしてどの程度ご参考になっているかと、ご本人が気がかりであるようです。ファンレターでも差上げて下さい。同様にあたらしい薬の麻生・村山両先生も288pと300pにわかれて載せられており、すでに14まできました。どのような受けとめ方をなされているのか、反応があると大へん有難いと思ひます。

◇ 学会記事は泌尿器科集談会ひとつでした。千葉医学会例会との関連については、桑田集談会幹事のお考えもあって、形が改められてゆく可能性があります。しかし学内で行なわれる集談会やセミナー、特別講演、研究会などの記事は、やはり載せてゆくべきで、ご投稿をお待ちしています。

◇ 編集業務にたずさわって1年半以上になりますと、そろそろ読者からの声が聞きたいという思いが編集委員一同におこってきます。本誌を通じて会員諸兄と会話ができたら幸甚です。  
(萩原弥四郎)